

SHOW MEY シネマ 4

★★★

ホワイト・クロウ 伝説のダンサー

2018年/イギリス・ロシア・フランス合作映画
配給：キノフィルムズ、木下グループ/127分

2019 (令和元) 年 5 月 20 日鑑賞

シネ・リーブル神戸

Data

監督：レイフ・ファインズ

出演：オレグ・イヴェンコ/アデル・エグザルホプロス/セルゲイ・ポルーニン/ラファエル・ベルソナ/ルイス・ホフマン/チュルバン・ハマートヴァ/レイフ・ファインズ

■ショートコメント■

◆『白いカラス』(04年)はアンソニー・ホプキンスとニコール・キッドマンが共演した名作だったが、クソ難しい映画だったため、客の入りはイマイチだった。しかし、そのテーマと「白いカラス」という邦題の付け方には感心したものだ(『シネマ4』146頁)。

しかし、本作のタイトル『ホワイト・クロウ』とは「白いカラス」のこと。本作ではそれを「類いまれな人物」「はぐれ者」という意味で使っているが、本作を観ている限り、実在したソ連の天才バレエダンサー、ルドルフ・ヌレエフ(オレグ・イヴェンコ)はたしかにそうだ。

◆本作は1938年に列車の中で生れたヌレエフの、①貧しい少年時代、②バレエアカデミーに入学し、がむしゃらにバレエに打ち込んだ青春時代、③成功者となって公演で訪れたパリでの日々、という3つの時代を交錯させながら、ヌレエフの「ホワイト・クロウ」ぶりを描いていく。レニングラードのバレエ学校で17歳のヌレエフの才能を見抜き指導したのはアレクサンドル・プーシキン(レイフ・ファインズ)だが、本作では、その妻がプーシキン以上にヌレエフを献身的に世話をする姿が目立つ。そしてまた、それがあつと驚く中盤の2人の関係に繋がっていくので、それに注目!

しかし、本作では冒頭から、ヌレエフのコンプレックスの裏返しともとれる自信過剰ぶりと自分勝手ぶりが目立つため、彼の主張を支持するのは、どうも・・・?

◆ヌレエフが厳しいバレエの練習の間に将来を見込んで英語の勉強をしていたのはさすが!そのため、団体行動しかできない「パリ公演ご一行様」と違って、ヌレエフだけはKGBの厳重な監視にもかかわらず、かなりの“自由”行動を!一人で行ったルーヴル美術館等から得られる芸術的センスは、バレエの高みを目指すうえで大きな価値があったようだが、

当局の締め付けが次第に強まってくると・・・。

◆私の大学時代には、ソ連のピアニスト、スヴァトスラフ・リヒテルの来日があり、日本中が大いに沸いたが、もちろん彼の日本への政治亡命はなかった。しかし、本作のクライマックスでは、サスペンス映画顔負けとなるスリル満点の“亡命”シーンが登場するので、それに注目！もちろん、そこには協力者が必要だったが、さて、ヌレエフに協力した女性とは？

歴史上の事実としての本作の重みをしっかり感じつつ、ヌレエフのバレエのすばらしさとヌレエフの「ホワイト・クロウ」ぶりをしっかり確認したい。

2019（令和元）年5月23日記